

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 19号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内
TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp

「この身になりますように」

「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」
(ルカによる福音書 1:38)

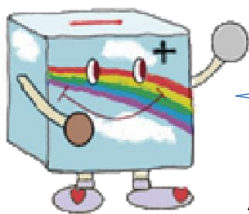


沖縄教区主教 ダビデ 上原榮正

今、教会はクリスマスの喜びに包まれています。主のご降誕は、マリアがイエスさまを、その身に引受けて下さったことによって実現しました。もし、天使がマリアに「**あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。**」(ルカ1:31)と告げた時、マリアが「私には、ヨセフという婚約者がおります。たとえ神さまのみ子でも、産みたくはありません。」とお断りをしていたなら、イエスさまはこの世界にお出でになれませんでした。受胎告知へのマリアの受諾があったからからこそ、世界はイエスさまをお迎えし、私たちが罪の赦しや永遠の命という神さまの救いに与ることができるようになりました。

私は、教会での婦人会のご奉仕は、そのようなものだと思っています。今、どの教区の教会も、その信徒のメンバーの殆どが、ご婦人の皆さま方ではないでしょうか。私の教区では、おそらくは80—90%の礼拝出席者が、女性の皆さま方だと推測をしております。教会でのご奉仕は、気安く楽しいものばかりではないと思います。時には難儀なことや辛いこともあるかと思っています。もし、婦人会の皆さまにご奉仕をお願いしたときに、「私は、嫌です。」「都合が悪いです。」「私には、無理です。」などとなれば、教会は大変なことになります。何故なら、礼拝、宣教、牧会のみ業を行うには、聖職者だけではできないからです。誰かの助けが必要です。今、信徒数が少なくなっていく中でも、婦人会の協力と助けがあって、教会が運営されていることに感謝をしています。

また、日聖婦の感謝箱献金も伝道、宣教のために、広く使われていますことに、心から感謝をしています。皆さまの日々の小さな感謝と祈りが集まっての感謝箱献金が、聖公会の中では大きな働きをしています。今後共、婦人会の働きの上に、益々主の祝福がありますようにお祈りします。



報 告 会 に 行 っ て き ま し た ！

感謝箱献金をお献げしている団体の報告会に伺って、近況をお知らせいただいた内容をスタッフがお伝えするコーナーです。今回はサイディアフラハと難キ連のご報告に併せ、代表の荒川さんと佐藤さんから寄せいただいたメッセージを掲載いたします。

サイディアフラハ



2014年11月27日午後、コアの運営委員会の日に合わせて、丁度帰国されていた荒川勝己さんが横浜聖アンデレ教会に来られました。小柄で、にこやかな荒川さんは、まず「ご寄付をいただきありがとうございます」とお礼を述べられました。昨年までのお献げ先であったアルディナ・ウペポから施設建設資金の援助を受けて活動が始まったということです。

2014年度からは、荒川さんのケニアでの活動を直接支援するため、特に「エイズ・結核・麻薬セミナー」開催のため、感謝箱献金からのお献げ先となっています。今までの経緯をパワーポイントを使ってお話してくださいました。

この日は急な訪問でしたが、横浜教区婦人会長ほか数名の方が集まってくださいました。参加者たちは、荒川さんが持参された裁縫作業所の製品を購入し、また急遽呼び掛けて集めたクレヨンやクレパスをお土産としてお渡ししました。

荒川さんはケニアの女性と結婚され、お子さんも出来て、すっかりケニア人になられたようです。後日TVで荒川さんを紹介する番組(テレビ東京)が放送され、ケニアでの子どもたちの様子と日常の生活を映像で見ることが出来ました。

感謝箱献金事務局 スタッフ 金子みどり



茶話会では、さらに詳しい日常の様子などが語られ、報告会ならではのよき親睦の時間をいただきました。



キコイの布で作った支援グッズ販売の様子。元気の出る鮮やかな色彩に思わず笑顔が！

※サイディアフラハとは「幸せのお手伝い」を意味するスワヒリ語。首都ナイロビから30km南東にある海拔1500mのサバナの中にあるキテンガラという町で、助けを必要とする子どもたちを危険から守り愛情深くお世話をしている施設です

大家族主義のもとに子どもたちの未来を育む

在ケニア NGO サイディアフラハ
代表 荒川勝巳

サイディアフラハは児童養護施設、裁縫教室、縫製工房、幼稚園・小学校、そしてみなさまに支援していただいているセミナーなど、幅広い活動をおこなっています。

しかしこれらの活動で一番重要なのが児童養護施設運営維持で、他の活動はそれなりの意義を持っていますが、この施設を支えるためのものでもあります。

たとえばセミナーはサイディアフラハのある地域の人々を対象として、これらの人々に日常生活する上で必要な知識を提供しています。それと同時にサイディアフラハの活動、とくに児童養護施設の子どもたちへの理解を求め、一緒にこれらの子どもたちを守っていくという意識を持ってもらうことを目的にしています。

ケニアでは成人の病死などにより親のない子どもはたくさんいて、保護を求められています。しかもまだ男尊女卑の傾向が強く、男の子のほうが女の子よりも優遇されます。それでサイディアフラハでは女の子に焦点を当て、親がいなかったり、虐待されている女の子を施設で養育することにしました。

サイディア・フラハは私個人の力により運営されているように思われるかもしれませんが、そうではなくて、日本人の私とケニア人2名の共同運営でおこなわれています。このように日本人とケニア人が協力して運営管理することは機能的であり、活動的でもあるからです。

そしてケニア人スタッフたちの寄与も重要です。サイディアフラハの敷地の中には施設の横にスタッフ宿舎があり、私もそこに住んでいます。ケニアは伝統的に大家族主義で、サイディアフラハも施設の子どもたちとスタッフたちとが疑似大家族主義をとって暮らしています。それにより、施設の子どもたちはスタッフたちから日常生活を通じ指導を受け、社会性を培っていきます。

施設の子どもたちの教育は、その子どもが幼い時にサイディアフラハに入るとすると（小学校を出てから入る子もいます）、幼稚園と小学校をサイディアフラハで過ごします。（都合上、地域の小学校へ行っている子どももいる）それ以後は裁縫教室に入るか、外部の高校や訓練校へ行くかになります。サイディアフラハはアルディ・ナ・ウペポに支援されてから早くも15年になります。そのあいだにアルディ・ナ・ウペポからは裁縫教室を建てていただいたり、子どもたちの養育・教育支援等にたずさわっていただき、私どもは非常に感謝しています。みなさま、今後ともご支援をよろしくお願いします。



施設で暮らす高学年の児童と荒川氏(上段中央)



絵の具やクレヨン、その他の支援を寄せてくださった方々への感謝をこめて、子どもたちが作品を披露してくれている様子。



ホームページ、Facebook で最新情報がご覧いただけます。



たがいに取り合って～日本の難民支援の受け入れについてと面会支援

2014 年日本聖公会人権セミナーが 10 月 28 日(火)～30 日(木)、横浜教区横浜聖アンデレ教会を会場に開催されました。

29 日(水)は“たがいに取り合って～日本の難民の受け入れについて”と題して、講師に難民・移住労働者問題キリスト教連絡会（難キ連）事務局長の佐藤直子氏を講師に講演会が開催されました。

同日の午後にはフィールドワークが 4 つのグループに分かれて行われ、その一つに東京都品川区「東京入国管理局」への面会支援が実施され、全国から 11 名の方が参加されました。



人権セミナーには全国から定員 50 名を大幅に上回る 64 名の方が参加され、感謝箱献金のお献げ先を大勢の方に知って頂くことができました。

佐藤直子氏の講演は、仮放免中の難民一家が 2014 年 8 月カナダ政府から移住が認められ、同年 10 月にカナダに向けて正規出国された話など、最新の情報を取り入れての熱気あふれるお話でした。

難民とはどういう人のことを言うのかに始まり、難民申請者と認定者数の推移では、増え続ける難民申請者に対して、日本の難民認定率は平成 24 年度は 0.56 パーセントで難民認定率の低下・認定者の絶対数の少なさと言う問題点があると指摘されました。難民申請をして不認定の場合、異議申し立てをしたり、難民不認定の取り消しを求める裁判をしたりできますが、入管収容施設への無期限の収容の恐れがあります。仮放免許可ということもありますが、保証金（0 円～300 万円）・保証人・住居の決定が必要です。仮放免が許可されても働くことが出来ない就労不可や、国民健康保険加入の不可→医療費全額自己負担です。ある日突然、延長が取り消され収容されることもあります。

入管収容とはどんな状況でしょうか。そして入管被収容者面会はなぜ必要なのでしょう。無期限長期収容は拷問に等しく、収容施設内は外部の人間にとってブラックボックスです。いかなる人権侵害が起こったとしても、内部からの発信がなければ問題は伝わりません。一人でも多くの被収容者を外部支援者へのアクセス確保と丁寧な聞き取りによって、様々な問題を早期に発見できることがあります。

入管被収容者面会、差し入れなどに加え、面会からみえてくる根本的な処遇問題改善、医療改善の為に、いろんな関係団体とも手を携えて持続的な面会活動を続けたいと語って下さいました。

午後からはいよいよフィールドワーク実践です。面会支援ガイダンスを受け、面会許可申請書の記入や身分証明書及び連絡メモの確認をした後、品川の東京入国管理局を目指して出発。東京入管局に着いてからは、面会許可申請書の提出をし、3 グループに分かれ、1 グループ 4 名で 2 名の被収容者の面会支援です。

主な聞き取り事項は、難民になった経緯、現在の健康状態、特に病気の悪化、睡眠、家族の状況、食事、今後の日本での生活希望の聞き取りが中心です。

2 回の面会が終わると参加者全員集合して面会聞き取り表の集約を行いました。

私が面会した一人は 21 歳の青年で体調を崩しており、今出されている薬の名前を窓越しに見せてくれました。その薬の名前を書き写すだけで精一杯でしたが、全員集合の席で佐藤直子氏にお話しするとあまりに多い薬の種類で過剰投与と思われるとのことでした。もし仮放免になって外に出た場合、薬をやめると禁断症状が出る可能性があるということで、この青年は引き続き佐藤直子氏達が面会支援して頂けることになりました。また、難民申請が就労目的と疑われるケースもあり、聞き取り会話からいろいろ推察して、個々の被収容者に適切な支援を模索していかれる姿を目の当たりにしました。

感謝箱献金のお献げ先、難民・移住労働者問題キリスト教連絡会（難キ連）の活動に参加させて頂き、顔と顔が見える関係の大切さを知ることができました。

感謝箱献金事務局スタッフ 近藤 順子

※難民：祖国で宗教や人種の違いにより迫害を受けたり、戦争や政治的な状況で自分の命を守るため、やむを得ず母国を離れ、他国に逃げざるを得ない人たち。難民認定されなければ非正規滞在者となり収容されます。

難キ連（難民・移住労働者問題キリスト教連絡会）は 2013 年度から感謝箱献金のお献げ先となった団体、2014 年も引き続き 20 万円をお献げすることが 6 月に開催された第 1 回会長会で決議されました。

「獄にいるとき訪ねてくれた」

難民・移住労働者問題キリスト教連絡会

代表 佐藤 直子

難キ連が入管被收容面会支援を始めてからまもなく 15 年目を迎えようとしております。2001 年アメリカ同時多発テロ後に首都圏在住のアフガニスタン人や成田空港で難民申請を却下されたアフガニスタン青年達が牛久市の東日本入国管理センターに收容されました。両親が財産を処分して国外に逃亡させた青年達の自殺未遂や自傷行為が一人のイラン人被收容者によって外部に伝えられ、弁護団、市民活動家、難民支援団体、学生が彼らの救出のために「在日アフガニスタン難民支援ネットワーク」を立ち上げその事務局を担ったのが難キ連です。面会支援を始めた当初は一日に 20 数名の面会も行いう一方、イー ド（犠牲祭）には夕食の差し入れを行ったこともあり、厳重な警備体制の下、夕食の配膳を行いました。

自傷行為は止むことなく、2002 年 3 月 WCC (World Council of Churches) 総会のために来日した WCC 総幹事の聞き取りによりアフガニスタン難民の收容が世界に知られることとなり、被收容者全員が 2002 年春に仮放免となりました。
佐藤 直子さん

それ以後、入管内外からは被收容者面会の要請が途絶えることなく現在にいたっております。今夏、アメリカ合同メソジスト教会派遣の 3 人の大学生にも被收容者面会に取り組んでもらいましたが、特にブラジル人学生 T 君は多くの日系ブラジル人被收容者とポルトガル語で共に祈る面会が 1 ヶ月半の間ほとんど毎週続けられました。幼いころに両親に連れられて来日、日本語で教育を受け、既に日本国内に生活基盤が構築されている日系ブラジル人青年達が何らかの罪により滞在許可を取り消され、罪を償った後入管に收容されます。身寄りもなく言葉もおぼつかないブラジルへの送還への不安に慄き、これまで何件もの自殺未遂、自死が報告されております。T 君帰国後は事務局が彼らの日本社会への復帰を祈りつつ面会やコーヒーの差し入れを続けております。

現在、難キ連ではデボラ宣教師の協力を得て、品川、牛久両入管收容場の被收容者面会支援を行っております。近藤様のご報告にもありましたように、横浜教区社会委員会の皆様には春秋面会支援のご協働をいただきました。特に、面会いただいたバングラディッシュ青年 M さんは、12 歳で両親と共に来日後里子に出され、困難な道を歩んだ末、バイクの衝突事故で顔面強打、上下前歯をほとんど失い、警察に補導された後、入管に收容されていましたが、投与されている薬の多くが安定剤であり、何より面会当初は咀嚼ができないことから体重の著しい減少がみられ、歯の治療が先決すべき問題となっておりました。面会を続けているうちに 2011 年に難民申請を行っていた事がわかり、難キ連では鶴見大学歯学部 of 難民無料診療（保険範囲診療をすべて無料で提供）に取次ぎ、支援者間の歯科治療費の負担という重荷が外された後、保証人であり受任弁護士の O 先生との協働で 12 月 12 日に仮放免許可を得る事が出来ました。すでに鶴見大学歯学部病院の診療予約も頂き、M さんの入れ歯装着も視野に入れた治療が始まります。M さんのこれからの人生に神様のお導きと御見守りをお祈りしております。

ボランティアを始めた頃の方が「魂が吸い取られるような疲労感」と表現したそうですが、入管被收容者面会は無力感との戦いでもあります。難民や様々な止むを得ない状況の中で超過滞在になり、いわゆる不法滞在者として送還におびえながら收容されている人々を簡単に救済できる術（すべ）が私たちにはありませんが、彼らを度々訪れ、彼らの言葉に耳を傾け、祈りつつ問題を整理しながら彼らと共に歩むうちに一人、二人と助けびとが備えられ道が開かれることも私たちの大きな喜びとなってまた收容所に向かう力が与えられます。皆様のご支援に心からの感謝を込めて微力ながら彼らとともに歩み続けたいと願っております。

「獄にいるとき訪ねてくれた （マタイ 25 章 36 節）」

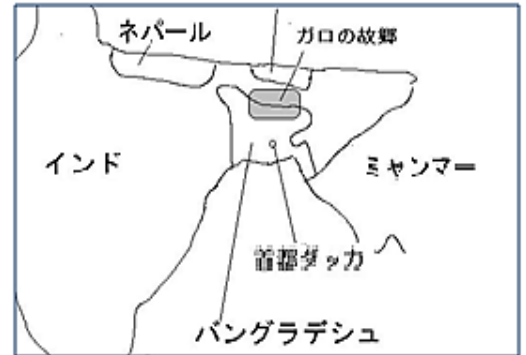


「リグリマ 10 周年 記念集会」に参加して

感謝箱献金事務局 スタッフ 土屋 晴子

11 月 27 日早朝リグリマ・ジャパンの代表 上澤伸子さんと出発。ダッカの空港にはリグリマ・バングラデシュの代表ラブリーさんとご子息サルセンさんが出迎えて下さいました。車中からの風景は 3 年間インドに駐在していた私には懐かしく、里帰り気分でした。

翌早朝、ラブリーさんとリチル(聾唖学校教師)、プロシア(コイノニア NGO 職員)とドライバー 6 人でビリシリへ出発。ダッカの街中の渋滞は壮絶です。街を出ると煉瓦を砕いて作った道路を上下左右に揺られながら 5 時間半しがみついて…(その中でも眠っていた私がこわい!) ドライバーの腕と体力には脱帽です。



↑ ガロバプテスト教団本部

12 時半、ガロバプテスト教団本部に到着。ラブリーさんの夫リトン牧師が出迎えて下さいました。ここは教会、医院、食堂、職員の住居、3 ヶ月前にオープンしたゲストハウスが点在し穏やかな空間が広がっていました。カレーの昼食を手で美味しくいただき、まだコンクリートが乾ききらないゲストハウスへ。お湯が出れば言うことなしの居心地良いお部屋に、ガロの“おもてなし”を感じます。夕方、12 の地域に点在するグループ中 9 グループが到着し、再会を喜び挨拶しあっていました。



18 時、祈祷で記念集会がスタートし、ビリシリグループの子供の民族舞踊が披露され、その上手さに驚かされました。リグリマ・ジャパンの上澤さんがスピーチをされた後、日本聖公会婦人会からのメッセージをベンガル語に訳して代読し、お祝いを渡していただきました。そして、感謝箱献金事務局から私が挨拶し、司祭、スタッフからの一言カードを読み上げ、日本聖公会婦人会の気持ちをお伝えしました。

カレーの夕食をガヤガヤと賑やかにすませ、ガロ民族の美しい民族舞踊を堪能し、前夜祭は幕を閉じました。“お湯が出れば…”のゲストルームでリトン牧師から拝借した電気ポットでせっせとお湯を沸かし、お湯浴び、言うことなしの就寝でした。

* * * * *

翌日、カレーとチャパティで朝食後、教団スタッフとガロ 31 人で礼拝が行われ、二日目スタート。リグリマ・ジャパンの上澤さんとリグリマ・バングラデシュのラブリーさんによってパワーポイントを使用しての『共に歩んだ 10 年間』が話されました。

ガスの通っていない村にとって改良かまど(一つの焚き口に 2 つの鍋で同時に料理が出来、煙突がある)ができ、煙が充満し一度に一鍋しか作れなかった時とは雲泥の差、感謝感謝です。とてもきれいに大切に使われており、それは訪問した複数のご家庭も同様でした。



しかしこの煙突が壊れ易く、修理代の余裕などありません。国や政府から疎外されがちな少数民族、気が遠くなる程沢山の問題を抱えながらもリグリマの一步一步で改良かまどや裁縫訓練（感謝箱援助）が行われていて、リグリマの努力には頭が下がります。

←右写真：屋根から突き出た煙突

←左写真：「改良かまど」が設置されたガロのお宅

次に、それぞれのグループに分かれて必要事項を 5 つ上げて発表しました。

必要事項のランキング

- 1、豚や牛の追加購入
- 2、池の再掘削（清掃した池で稚魚がよく育ち蛋白源が得られる。
堆積した池の土砂を取り除けば洪水時の魚の流出が防げる）
- 3、子供の教育（高等教育を含む）と意識向上
- 4、手芸品の販売（収入増加プログラム）
- 5、交流と祈り：ベンガル人社会でマイノリティとして暮らす中、
ガロ語で語り合い、ともに祈れる精神的な時間を、婦人ばかりでなく、家族を交えて持ちたい。
- 6、貯蓄：リグリマの会員は、毎月 1 人 10 タカ (15 円) を集金・貯蓄し、5 タカは子どもの教育基金に、5 タカは中央委員会の経費に当てられます。
※相互扶助の貸付は、この共同貯蓄とリグリマの支援費から拠出されています。



ここで リフレッシュタイム、日本から持参したお土産のお菓子とミルクティー、おしゃべりに花を咲かせ、お菓子は子供に持ち帰る人がほとんどです。母心はどこの国も同じです。

それぞれのグループが手芸品を販売、刺繍のテーブルクロス（写真：右）、ブラウス等裁縫訓練で頑張っている様子がうかがわれ、支援の成果を確信しました。



↑ 上澤伸子姉とリトン牧師

← 土屋晴子姉

最後に、リグリマ・ジャパン、上澤伸子さんと日聖婦への感謝の楯がリグリマ・バングラデシュから寄贈され、各グループから手芸品が贈られ、リグリマ・ジャパンから全員に水を浸して首にまく「冷え冷え首巻き」が贈られました。祈りを捧げて集会の幕を閉じ、皆それぞれ名残惜しそうに帰路につきました。

* * * * *

翌日、ワールドビジョン(キリスト教 NGO)を訪問。ここは子供達へのスポンサーシップ活動を中心に、支援受給家庭の親の生活向上、教育支援、経済基盤創生プロジェクトの支援、親子健康プロジェクト等の仕事をしています。他にも、様々な困難のなかにあるバングラデシュの人々を日本の NGO が支援している地域についてのお話などを伺いました。



次にハルアガートにある聖公会が運営する施設「セント・アンドリュース・ミッション・ハルアガート」を訪問しました。教会と修道院に隣接して、中・高等学校、寮があり、2棟ある女子寮は修道院運営のものと教会運営のものがあります。修道院の運営する寮は格段に寮費が高いそうです。

修道院で、シスターミラにお会いしたとたん「どちらから？」と日本語で聞かれびっくりしました。

以前和歌山にあった神愛修女会のシスターが20年間ここでご奉仕していらした経緯があり、日本語を覚えられたようです。交流のお姿が見えたようでした。敷地内にある教会の建設資金はアメリカの感謝箱献金が用いられたそうです。

アングリカン・ミッションの輝く笑顔の美男美女と別れ、ジョイランクラ・バプテスト病院へ。この病院村人からも感謝されていますが、残念なことに病院内は昼間でも暗く、新生児病棟と一般病棟がカーテン一枚で仕切られていたり、分娩後の女性が病棟に入れずにベランダの床のマットに寝かされていたりと、衛生面でも施設面でもまだまだ不十分と感じられました。また、医療を担う学生へのスカラシップも必要のようでした。

病院に隣接して看護師学校があり、看護師や助産師の政府公認資格が取得出来ます。助産師の卵達は病院休日にもかかわらず、赤ちゃんの蘇生の仕方等を頑張って学んでいました。

また、この病院では収入を得るために敷地の一部を貸し出し、NGOが豚や魚の養殖をおこなっています。黒豚の大きさ、多さには驚きでした。

この夜は、お湯の出る病院のゲストハウスで言うことなしの爆睡。翌日、牧歌的な風景と別れるのに淋しさを覚えながら、ダッカに向けて出発しました。

決して財政面では豊かとは言えないバングラデシュ。しかし私の出会ったガロ民族においては、いつも神に感謝し祈り、沢山の笑顔や優しさ、相手を思う心に本当の豊かさを知らされました。まだまだ一緒に居たいという思いを残しての帰国でした。

* * * * *



修道院の門の前で



↑ジョイランクラ・バプテスト病院



↑人形を使つての蘇生術の訓練に励む看護学生



魚の養殖池



養豚の様子





日本聖公会婦人会・感謝箱献金は皆さまよりの尊い献金を、各教区婦人会を通して(50%以上)送っていただき、総会・会長会で審議した後、国内外のお献げ先に送金しています。各教区においても教区分の感謝箱献金を独自にお献げしています。このコーナーでは各教区の婦人会長や役員の方に感謝箱の献金先や思いについて、原稿を頂き掲載していきたいと思います。

今号は横浜教区婦人会会長・宮崎さんのメッセージをお届けいたします。

横浜教区婦人会の感謝箱献金 2014 年度もお献げ出来ました

横浜教区婦人会 会長 リベカ 宮崎淳子

横浜教区婦人会は、地域持ち回りで教区婦人会役員を担っておりますが、そんな中で私は、思いもかけず役員会メンバーに要請されて会長をお引き受けしました。まったく初めて出会うことも多く緊張しております。

昨年6月、日聖婦会長会に初めて参加させていただき、感謝箱献金事務局(コア)委員の皆様や日聖婦役員の皆様から感謝箱献金の取り組みについてご報告をお聞きし、2014年度の感謝箱献金先についての審議にも加わりました。2014年度の感謝箱献金先については既に「ガリラヤのほとり 17号」(2014. 7.30 発行)で詳しくご報告されていることはご承知の通りです。

今までは一婦人会会員として、感謝箱献金はさせていただきましたが、献金先のことは役員の皆様にお任せで過ごしてまいりました。この度日聖婦会長会に出席して委員の皆様から直接、感謝箱献金先の現地の様子や実情をお聞き出来ましたことはとても貴重な体験でした。長い年月の間続けられてきた日本聖公会の婦人たちの、お祈りとともに献げてこられた感謝箱献金が、とても大きな働きであることを改めて教えていただきました。

「感謝箱献金」というと、私は日曜学校に通っていた幼い頃、母親に言われて、献金箱に5円とか10円とかを自分の財布から嬉々として箱に入れていたような思い出があります。

私一人の日常の生活の中からのわずかなお献げも、婦人の会でまとめてお献げすることによって、困難な環境にある子どもたちや女性の人々に、少しはお役にたっているのかなと思うと、コア役員の皆様のお働きとご努力に心より感謝申し上げたいと思います。

2014年度横浜教区の皆様から寄せられた感謝箱献金はおおよそ113万円、内56%は日聖婦感謝箱献金へ(約64万円)、残りは教区の献金先に献げられました。横浜教区婦人会で例年お献げしているところは、ウイリアムス神学館後援会、聖公会神学院後援会、横浜市のベタニヤホーム後援会、フィリピン神学生援助、教役者遺児教育基金、寿町プロジェクト、アハリー・アラブ病院支援(2014年度のみ)、エリザベス・サンダースホーム、教区の神学生奨学金基金(聖ラファエル会)等などです。今年度教区婦人会でお献げした献金額は約49万円、団体一ヶ所に当てるとわずかな額かもしれませんが、顔の見える関係を大切にして、継続して婦人会皆様の貴重な思いをお届けすることが出来るようにと役員会一同お祈りしております。

世界の支援を求めている団体については、日聖婦感謝箱献金の事務局皆様の積極的な情報提供に基づき、会長会での審議を経ることが重要なことと思います。そしてお献げ先の具体的な情報を、各婦人の会皆様が共有して、ご一緒にお祈りをしていくことが大切だと思います。武藤謙一主教様が語られているお言葉、『感謝箱献金を献げるわたしたちも、それを用いてくださる方々も共に、主によって生かされ愛されている者であることを実感したいものです。』(ガリラヤのほとり 18号より)を心にとめ、感謝箱献金事務局(コア)皆様のお働きに深く感謝して、これからも感謝箱献金をお献げしていきたいとおもいます。

感謝箱とわたし

聖職候補生 フランチェスコ 成岡 宏晃

「感謝箱献金の祈り」は、聖公会神学院在学中から今に至るまで、わたしの心の支えでありつづけています。神学校では、共同生活の中で上手くコミュニケーションをできないことや、自分の心がなかなか前を向いていくことができなくなることが少なくありませんでした。また、教会に遣わされてからも聖職に召されたことに不安が続いていることです。

そんな時に、わたし自身の心の中に最も欠落しているものは、わたしの身の回りに起こっている出来事と丁寧に向き合うこと、その出会い一つひとつに感謝する心であります。この丁寧な心や感謝は、思いを込めて献げる小さな働きと、小さな働きを通して連帯することによって生まれます。

目に見えやすいところに置いているつもりであるにもかかわらず、気がつけば、どこかに埋もれてしまっている、我が家の感謝箱。それは同時に、いつの間にか祈ることを忘れてしまっている、わたし自身への警鐘かもしれません。

「いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことに感謝する」という、信仰生活の基本であり、かつ最も難しい生き方について、感謝箱献金はいつもわたしに問いかけます。感謝箱とわたしの関係は、他でもない神さまとわたしの関係であり、わたしの心が主イエスさまと共に在り、神さまの方を向いているのかということの、目に見えるしるしのようなものであるような気がします。

これからも、この感謝箱を通して、多くの祈りによって支えられ、お一人おひとりの感謝によって生かされている喜びをいつも感じていただけますようにと心から願っています。



プロフィール

名前：成岡 宏晃（ナルオカ ヒロアキ）
生年月日：1983 年 5 月 22 日生
最近のマイブーム：ジグソーパズル
特技：自分の散髪
近況：現在は大阪教区
東豊中聖ミカエル教会
聖ミカエル保育園に勤務

東日本大震災支援積立金の活用について



日本聖公会婦人会 感謝箱献金では東日本大震災支援のため、2011 年度より「大震災支援積立金」として 5 年間積み立てており、既に南相馬の「原発事故から命と環境を守る会」などにお献げしています。2013 年度より、各教区・教会で被災者を支援するプログラムを実施する場合 10 万円を上限に申請することが可能となりましたので、ご活用いただきたいと思います。

各教区の婦人会を通して申請して下さい。

日本聖公会婦人会・感謝箱献金事務局

編集後記 ☞

2015 年になり初めてお届けします。今回は「リグリマ」10 周年記念行事参加、難キ連、サイディア・フラハの報告などを掲載しました。また、各教区婦人会からの感謝箱献金お献げ先と感謝箱に関する方針や思いを伝えていたたく、今号は横浜教区にお願いしました。教区婦人会(女性の会)のご協力を得て、出来ることは小さくても祈りの心をもってお献げすることが大切だと思っています。

(古谷美子)